

聖書：ヨハネの黙示録 5：8～14

説教題：子羊への賛美

日時：2021年2月7日（朝拝）

今回は5章の前半部分を読みました。そこに記されていたことは御座に着いている方、神がこの世界とその歴史に関する詳細なご計画を持っておられること、そしてそのことが巻物に書かれているということでした。その巻物は7つの封印でしっかり封じられていました。そこで力ある御使いが「誰かこの巻物を開き、封印を解くことのできる者はいないか」と大声で全世界に呼びかけましたが、それができる者は一人もいませんでした。そのため、ヨハネは激しく泣いたと記されていました。この巻物が開かれないということは、神の御心が知らされない状態に置かれるということ、そしてそれ以上に巻物に書かれている神の計画が進展して行かないということの意味します。当時、ヨハネを初めとして主に従うクリスチャンたち、アジアにある諸教会は迫害下にありました。神は良い救いの計画を持ってくださるはずなのに、この巻物が開かれないということは、その御心が進んで行かないということです。ということはこの苦しい状態にずっと置かれ続けるのか。終わりが見えないまま、いつまでもこの状態に放置されるのか。しかしその巻物を開き、封印を解くことのできる方がいる！と長老の一人がヨハネに語りました。それは「ユダ族から出た獅子」、また「ダビデの根」と呼ばれる方であると。そうしてヨハネが目を上げて見たのは、6節に出て来た「屠られた姿で立つ子羊」でした。これは十字架にかけられて死に、復活して今も生きているイエス・キリストを指します。この方が神の右の手から巻物を受け取ったというところまでを前回見ました。その時に沸き起こった賛美が今日見る箇所の内容です。

まず8節に「四つの生き物と二十四人の長老たちは子羊の前にひれ伏した」とあります。これらは4章で見ましたように、御座の近くで神に仕えている天使的存在と考えられます。彼らは子羊の前にひれ伏しました。同じ表現は4章10節で御座に着いておられる方、神を礼拝する時にも使われていました。それと同じように彼らは子羊を礼拝したということです。これはイエス・キリストは神と等しい方、神ご自身であることを示唆するものでもあります。彼らはそれぞれ豎琴を持っていました。これはこの後、彼らが賛美する際、一緒に用いたものでしょう。ここから天における礼拝には楽器が用いられることが分かります。また彼らは香に満ちた金の鉢

を持っていました。「香」とは「聖徒たちの祈りであった」とあります。思い起こされるのは使徒の働き 10 章に出て来る百人隊長コルネリウスという人のことです。御使いは彼に「あなたの祈りと施しは神の御前に上って、覚えられています」と言いました。ヨハネの黙示録が書かれた当時の教会やクリスチャンたちは迫害の中、苦しい状況に置かれていました。しかし彼らの祈りは香のように、かぐわしい香りとなって神の御前に覚えられていたのです。しかもそれは金の鉢の中に収められていました。それほど尊いものとして天使たちを通して神の前に持ち出されています。そしてその彼らの祈りは確かに神に聞かれるということがこの後、黙示録の中で記されて行きます。私たちの祈りはそのように神の前に立ち上り、香しいものとして覚えられるのだということを今一度心に留めさせられたいと思います。

彼らがささげた賛美が 9～10 節に記されています。9 節に彼らは「新しい歌を歌った」とありますが、この表現は旧約聖書にその用法が見られるものです。イスラエルの民は、神が敵に対する勝利を与えてくださった時など新しい救いを体験した時に「新しい歌」を作り、歌いました。ここでは子羊が巻物を受け取ったことによって神が計画された最終的な救いの御心がついに実現しようとしています。その恵みを思って彼らはこの歌を歌ったわけです。

歌の内容を見て行きます。彼らはまず「あなたは、巻物を受け取り、封印を解くのにふさわしい方です」と言いました。前回も述べましたように、封印を解くとは単にシールのようなものを剥がすことだけではなく、巻物に記されてある神の御心を実行し、展開させることも含みます。ですからそれができる力と権威と持つ人でなければ封印は解けません。ではその巻物に書いてあることとは何でしょうか。4つのことを順番に見て行きます。一つ目は「人々を神のために贖う」ということです。「贖う」という言葉は、それまでその人々が奴隷状態にあったことを意味します。神はもともと人間を非常に良いもの、神にあって自由な存在として創造されましたが、人間は悪魔の誘惑に負け、罪を犯して、罪の奴隷またサタンの支配下にある者となってしまいました。その奴隷状態から人間を贖うこと、そこから救い出して自由にするのを神はご計画くださいました。そのために必要なのは代価を払うことです。ただでは救い出せません。身代金を払って奴隷を買い戻す時のように、相当な、そして莫大な代価が必要です。一体誰にそんなわががができるでしょうか。誰もできません。しかしただ一人それができる方がおられました。それがイエス・キリ

ストです。その方法はキリストがご自身の無限に尊いのちを身代わりにささげることでした。ですからここに「あなたは屠られて」と書かれています。これはイエス様の十字架における身代わりの死を指すものです。世の人々の目から見れば十字架は敗北者のしるしであり、愚かで恥ずべきものかもしれません。しかしこの方法による救いは旧約聖書から示されて来ました。あの出エジプトの時、イスラエルはエジプトの苦役のもと、まさに奴隷状態にありました。そこから彼らが贖われる際、子羊が屠られました。しかし今やあの過越の子羊が指し示す神のまことの子羊、イエス・キリストが屠られました。かつて流されたのは動物の血でしたが、今や流されたのは神の御子である方の尊い血です。それゆえにその犠牲は神のために多くの人々を贖うことができます。ですから天使的存在は、子羊キリストに向かって、あなたこそが、あなただけが、この巻物を受け取り、封印を解くのにふさわしい方です！と賛美したわけです。

2つ目にその贖いは「すべての部族、言語、民族、国民の中から」と全世界に広げられたことが歌われています。これも聖書の最初から示されて来たことでした。神はアブラハムを通して神の民イスラエルを起こそうとされた時、全世界の救いを考えていたことが、彼の召命の御言葉である創世記 12 章 3 節に示されていました。「わたしは、あなたを祝福する者を祝福し、あなたを呪う者をのろう。地のすべての部族は、あなたによって祝福される。」このことはアブラハムが信仰に生きて、一人子イサクをささげた時も創世記 22 章 18 節で繰り返し約束されました。「あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福を受けるようになる。」そして同じことは旧約の預言書、たとえばイザヤ書 60 章 1～5 節で「起きよ。輝け。まことに、あなたの光が来る。主の栄光があなたの上に輝く。」と言われた後、「国々はあなたの光のうちを歩み、王たちはあなたの輝きに照らされて歩む。」と語られたことにも示されていました。その約束がついにこのキリストを通して実行に移されて行きます。

3つ目に贖いの目的も示されています。10 節に「私たちの神のために、彼らを王国とし、祭司とされました」とあります。同じことはすでに 1 章 6 節で言われていました（出エジプト記 19 章 6 節参照）。王国とするとは、神を王とする王国の国民とするということです。王である神の御言葉に喜んで従い、その神のご支配に喜んで生きる民となることです。もう一方の祭司は他者のためにとりなす人です。周り

の人々が神を知り、神との生ける交わりに生きて祝福されるように仲介の働きをすることです。それは具体的には言葉と生活をもって神を伝えること、またそのために祈ることを意味します。これはまさに今日の私たちにもそのまま当てはまります。私たちはただ滅びから救い出されただけでなく、神の王国また祭司とされました。神の国民として王である神の御言葉に益々従う歩みをし、またこの恵みを周りの方々に宣べ伝え、その祝福に仕える歩みをすることです。

4つ目に10節の最後に「彼らは地を治めるのです」とあります。本来、神のかたちに造られた人間は創世記1章28節で「生めよ。増えよ。地に満ちよ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地の上を這うすべての生き物を支配せよ」と言われたように、神の御心に沿って、神ご自身が治めるように世界を治め導く使命が与えられました。しかし罪を犯した人間は自己本位に生きるようになり、神の目的を無視して、周りのものを破壊する生き方をするようになりました。しかし私たちはここでもう一度本来の使命に回復されるのです。私たちが出て行くところ、遣わされるところで、自らが神の御旨に従う歩みをする。またその生き方を通して、また御言葉の宣教を通して、私たちの周りで神の御心が行われるように働きかけていく。こうして「地を治める」という本来の栄光ある働きを担う者となるよう導かれるのです。子羊による贖いはその生き方へと私たちに回復させてくれるものなのです。

さて続く11～14節にはさらに沸き起こった賛美の様子が記されます。11～12節は多くの御使いたちによる賛美です。これまでは御座のすぐ近くにいた天的存在による賛美でしたが、こちらはさらにその外側に取り巻く多くの天的存在による賛美です。「その数は万の数万倍、千の数千倍」ととにかく数え切れないほどであったことが強調されています。そしてそれは「大声で」と言われています。ここでも彼らの賛美は子羊が屠られたことに焦点が当てられています。その子羊について7つの言葉で賛美されています。前半4つの「力、富、知恵、勢い」は子羊キリストのご性質に関するもの、後半3つの「誉れ、栄光、賛美」は私たちがささげるふさわしい応答を表しています。

そして最後13～14節にあるのはすべての造られたものによる大合唱の賛美です。これはやがての将来の日に完全に実現するものです。ローマ人への手紙8章19～21節：「被造物は切実な思いで、神の子どもたちが現れるのを待ち望んでいます。被造

物が虚無に服したのは、自分の意志からではなく、服従させた方によるものなので、彼らには望みがあるのです。被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由にあずかります。」 聖書はこの世界を管理する人間が罪を犯したことによって、被造物全体にも罪の呪いがかかるようになったと述べています。その結果、被造物は今読んだ箇所「虚無」と表現される本来の輝きを失った状態に置かれています。しかし人間がやがて救いへと回復されることを通して、人間だけではなく、あらゆる被造物が御座に着いている神と子羊キリストを賛美するようになる。世界のすべては神とキリストを礼拝し、賛美することにおいて、これまで経験したことのない大きな一致と調和を体験し、またそこに最大の喜びを見出すのです。そこにそのように造られた自分たちの存在意味を豊かに見出し、それを永遠に楽しみ味わうようになるのです。この賛美を聞いて4つの生き物は「アーメン」と唱和し、長老たちは恐れと喜びを持ってひれ伏し、礼拝します。世界の歴史はここへ向かっています。このゴールに日一日と近づいていますし、子羊が巻物の封印一つ一つを解いて、そのように導くことが言われているのです。

今朝私たちは杉並教会設立満 62 周年を記念して礼拝をささげていますが、今日の箇所から思われることは、ここに記された神の恵みの働きとして私たちの教会もここに存在し、これまでの歩みが導かれて来たということです。本来私たちはこの神の恵みの働きがなければ救いはなく、ヨハネのようにただ激しく泣いて終わるだけの者たちでした。しかし神の約束に従ってキリストが地上に来られ、私たちの代わりに屠られ、尊い血を流してくださったことにより、神の素晴らしい救いの御心は展開されることとなりました。私たちはかつての罪とサタンの奴隷状態から代価を払って買い取られ、今や神の王国また祭司とされました。私たちはこのことを今一度受け止めて、益々御言葉に聞き従い、神のご支配に喜んで生きる歩みへ進みたいと思います。また祭司として周りの方々に私たちのことばと行いを通して神の福音を宣べ伝える歩みに進みたいと思います。そして私たちの行く先には今日見たようなゴールが待っています。賛美の輪はいよいよ大きくなり、ついにはすべてのものが神とキリストを賛美して大合唱に至り、それが永遠に続く日が来ます。私たちが毎週ささげる礼拝は、その日がやがて来ることを指し示し、またその日を今ここで先取りするものでもあります。その日を見つめて週ごとに神とキリストを礼拝し、この最終ゴールに必ず至らせていただく教会の幸い、またそのために用いられる主の教会の光栄と喜びに生かされてまいりたいと思います。